

長崎市立図書館が取り組むナラティブ支援

－「図書館 de サロン」という形の新たな試み－

井上彩，西岡由乃
長崎市立図書館

【背景】

長崎市立図書館では、平成 23 年より「がん情報サービス」を実施しており、科学的根拠（エビデンス）に基づいた情報提供を行ってきた。サービスを提供していくなかで、図書館へ情報を求めて来館する市民には、科学的根拠がある情報だけでは補えない部分があることを感じるようになった。そこで、エビデンスと対比して語られる“ナラティブ”がもたらす効果に着目し、エビデンスとナラティブの両面から市民を支援することによって、より幅広いケアを実現できるのではないかと考え、平成 26 年に「図書館 de サロン」を実施した。

【図書館 de サロン】

「図書館 de サロン」には、病院等で行なわれている“がんサロン”をベースに、図書館や司書の特性（多様なジャンル・テーマでの資料の提供、読み語り、ブックトーク等）を盛り込んだ。また、司書だけでは医療に関する専門的な知識やサポートが不十分であるため、長崎県福祉保健部医療政策課へ医療ソーシャルワーカーの派遣を依頼し、同席していただいた。参加対象者の設定は、がん患者とそのご家族だけでなく、がんに関心がある方とし、初の試みであることから、「来てくださった方に、まずは楽しんでもらう」という目標を掲げた。

【結果】

参加者アンケートでは「病気のことだけではなく、他の人の趣味などを知って自分も生活を充実させたいと思った」「いろんな人や本との出会いがあり、わくわくした時間だった」という好意的な感想をいただいた他、今後取り組んでほしいこと等、積極的な要望が寄せられた。「自分のことを話すこと」、「他者の話を聞くこと」、「場所や雰囲気、感情を共有すること」といったナラティブの要素を残しつつ、図書館らしさを活かしたサロンの実現の可能性を感じることができた。

【考察】

既に病院等で行なわれている“がんサロン”を「なぜ図書館で行なうのか？」という問いは、準備の段階から何度もスタッフ間で繰り返してきた。サロンには決まった方法がないことから、その答えを探すのは容易ではなく、未だに手探りの状態である。今後も回を重ねていきながら、長崎市立図書館ならではのがんサロンの実現、長崎市立図書館の「がん情報サービス」を構成する要素のひとつとして確立を目指したい。